

FD 活動の報告

尾 崎 明 人

留学生センターは、「教育の質の評価と改善をめざす」という中期目標にそって、平成16年度はFD活動に関して、

FD委員会を設置し、日本語教育担当教員全員でFD活動を推進する

教員が個別に行う授業評価を継続的に実施するという二つの年度計画を立てた。

に関しては、平成17年2月の企画運営委員会でFD委員会の設置が正式に決まり、FDの計画立案、実施にかかわる責任体制が整えられた。

に関しては、すでに平成14年から日本語・日本文化教育部門の中に専任教員・非常勤講師からなるFD班が設けられており、教員個々の教授能力の向上と日本語プログラムの改善をめざした取り組みを続けてきている。

この2年間の活動を踏まえ、今年度のFD活動は、日本語授業の改善に直結するようなテーマを個人またはグループで設定し、それぞれが適当と考える方法でFD活動を行うこととした。また、個別に行われるFD活動に関する情報を日本語教員全員が共有し、よりよいFD活動につなげることを目的として、年度末には個人、グループそれぞれがFD活動の年次報告を書くことにした。

その結果「ダイアログの授業における試み」「チェック項目による学習者同士のフィードバック」「読解授業における音読の効果」「漢字マッチングゲームの試み」「上級の作文の授業での試み」など合計21のFD活動報告が集まった。これらのFD活動では、授業評価の方法として学生からの授業評価アンケート以外にも自己の授業の録音、録画資料を利用しているものもある。いずれの報告も授業をめざした試みとそれに関する自己評価が含まれており、各教員のFD活動に対する真摯な取り組みがうかがわれる。

21点のFD活動報告をすべて年報に掲載することは紙幅の関係で不可能なので、FD委員会・FD班が21点の中から2点を選んで年報に掲載することとした。この2編を選ぶにあたっては、「授業について何を考

え、何をしたか、結果はどうだったか、が具体的に分かるもの」「報告の内容が他の教員にも参考になるもの」という2つの観点を重視した。

以下に活動報告2編を提示し、平成16年度留学生センターFD活動の報告とする。

[報告 1]

ダイアログの授業における試み

服部淳・大羽かおり

1. ダイアログの授業の問題点

教科書のモデル会話を素材として行っているダイアログの授業について話し合ってみた。その結果、次のような問題点を共有していることが分かった。

内容理解に時間がかかり、練習に十分時間が取れない。

授業の仕方が固定化してしまっている。

学生が受身になりがちである。重要な表現を覚えて練習することが中心になり、学生を積極的に活動させることができない。時間の制約もあり、学生が自発的に発話したいという気持ちに答えられていない。

2. 改善への試み

上記の問題点をすべて解決するのは困難である。そこで、の問題点を中心に考えていくことにした。それによって、の問題点の解決にも有効だと考えたためである。従来のやり方だと、学生は、予め用意されたものをインプットすることが中心となってしまう、覚えるのは大変だ、無理だという気持ちになっているように思われる。自分と「モデル会話」の距離が遠いと感じているのではないだろうか。そこで、その距離を近くするために、教科書のモデル会話を提示する前に、学習する会話を自分で考えてみるという作業をしてみようかと考えた。そうすることにより、モデル会話の理解、記憶、練習もうまくいくのではな

いかと思う。また、自分たちで作った会話とモデル会話との違いに注目させることにより、自然な日本語の習得へのヒントを与えることにも役立つと思う。

3. 授業での実践・学生の感想

2で述べた方法を日本語研修コースの各自の授業で2004年後期に試みてみた。2人が同じダイアログで試みることができればよかったが、スケジュールの都合でできなかった。そこで、服部が202クラス（未習者対象のクラス）で、大羽が203クラス（初級前半修了者対象のクラス）で実施してみて、学習者のレベルによる反応の違いも見てみることにした。本報告では、字数の制限上、今回の試みの中心となる授業の前半部分のみを記述した。

3.1 服部の担当授業

クラス：202（8名）

内容：A COURSE IN MODERN JAPANESE
(REVISED EDITION) Vol. 2
Lesson 11-1 落とし物

時間：90分

授業計画

00:00 新出単語確認（重要表現等も含む。）

00:10 【状況説明】

あなたは毎日地下鉄に乘ります。今日、地下鉄に乘る前に駅で友だちにテレフォンカードで電話をしました。電話が終わって、テレフォンカードを財布に入れました。地下鉄を降りて駅を出ました。財布がありません。多分、財布を落としたんだと思います。どこに連絡しますか。分かりません。それで、foreign student advisor's officeの山田さんに相談します。会話を少しずつ考えさせる。考えた文は板書する。

- ・まず、何と言うか：「山田さん、ちょっと教えてください。」
- ・状況の説明：「財布を落としたんですが、」
- ・助言を求める：「どこに連絡すればいい

いでしょうか。」

・「どこで（落としたんですか）」にどう答えるか：「（それが）よく分からないんです。」

・詳細説明の要求（財布を最後に見たのはどこ・いつ？）にどう答えるか：「地下鉄に乘る前に駅で電話したときはあったんですけど。」

00:25 前半部分のテープを通して1回聞かせる。
(単語表を見ながら)

自分たちの文と違うところは無いかをチェックする。

00:27 前半部分のテープを一文ずつ止めて聞かせる。(教科書のモデル会話を見ながら)自分たちの文との違いをチェックし、どうして違うのか考える。

00:35【以後、QA（大意把握）、詳細解説、練習、応用練習など。】

202の学生の評価

肯定的評価

- ・状況がはじめにわかったので、覚えやすかった。
- ・状況が分かった後で自分で会話を作ったので、実際の場面でも使えると思う。
- ・自分の考えた会話とモデル会話を比べることで自分の日本語の足りないところがよく分かった。
- ・自分の作った文がなぜ不適切なのかが分かってよかった。
- ・ただ与えられた会話を覚えるのではなく、キーセンテンス以外は自由に作れたのがよかった。
- ・自分たちで意見を出し合って会話を作るのが面白かった。

否定的評価

- ・教師と練習した後、学生間でも練習した方がいい。
- ・教師が受け持ったロール（山田）の練習ができなかった。

なお、同様の試みを Lesson 13 Dialogue 13-1「道を聞く」でも206Nクラス（203クラスと同じレベルの学生のクラス）において実施した。モデル会話全体を2つ（いいカメラ屋を聞く 道教え）に分けて実施したが、紙幅の関係で詳細は割愛する。

3.2 大羽の担当授業

クラス：203（7名）

内容：A COURSE IN MODERN JAPANESE
(REVISED EDITION) Vol. 2

Lesson 17-1 相談する

時間：70分

授業計画

00:00 インフォーマルスピーチの復習（lesson 15で学習したことを簡単に復習。）

00:05 新出単語確認・発音練習（終助詞「わ」「な」、「かしら」、「かな」の使い方も含む。例文を挙げて説明。次の会話につなげる。）

00:15 モデル会話冒頭の「ねえ、みんなと友達になったのに、まだ、一度も全員でパーティしていないね。」「そうだね。」の2文のみは、テープを聞かせ、意味を確認した上で、板書して、状況の説明に使う。

【状況説明】

アリスさんとルインさんとカーリンさんが日本語のコースのパーティを計画しています。アリスさんがパーティをすることをみんなに提案します（propose）。ルインさんも賛成します（agree）。とてもパーティがしたいようです。それで、パーティの日を決めるために他の2人に聞きます。アリスさんが来週の金曜日を提案します。カーリンさんも賛成します。次に、アリスさんが会費について他の2人に考えを聞きます。それから、ルインさんが人数のことを聞きます。人数が変わると会費が変わります。カーリンさんも「何人来る？」と言います。

上記のような説明を教師が少しずつしながら、学生に会話を考えさせる。モデル会話に出ているアリスの「高すぎる。」という発話までの部分を考えさせる。学生が考えた文は板書する。

- ・インフォーマルスピーチを意識させる。
- ・男女の違いを意識させる。（終助詞の使い方。）
- ・話し合いに使う表現を意識させる。

誘う。（パーティーしない。）

積極的な賛同。（いいね。しょう。しょう。）

意見を聞く。（いつにする。）（～はどうする。）
提案する。（～どう。）

00:30 テープ（アリス「高すぎる。」まで）を通して1回聞かせる。（単語表を見ながら）

自分たちの作った文とどこが違うか考える。

00:32 テープ（アリス「高すぎる。」まで）を通して1回聞かせる。

：教科書のモデル会話、単語表を見ながら自分たちの文との違いをチェックする。どこが問題なのかチェックする。

テープ（アリス「高すぎる。」まで）を一文ずつテープを止めて聞かせる。（教科書のモデル会話を見ながら）

詳細理解・発音練習

表現のまとめ（誘う、賛同、意見を聞く、提案する、など。）

後半もこれらの表現を意識させる。板書に残し、後半部分にも使う。

00:45 【以後、後半部分の理解・練習、全体を通しての練習。応用練習は、後日の Discourse Practice「パーティの話し合いをする」で行う。】

203の学生の感想

肯定的評価

- ・最初に自分たちで会話を考えたので、覚えるのが簡単になった。楽しかった。
- ・自分で作った文が正しいかどうかを確かめるためにテープを聞くのは、覚えるのに役に立った。
- ・いつもより今日の授業の方がいい。
- ・とてもよかった。学生が自分で文を作るから。楽しかった。
- ・こういう授業の仕方はよかった。

否定的評価

- ・この授業のやり方は好きじゃない。いつものやり方のほうがいい。
- ・ロールプレイが少なかった。もっと練習の時間があつたほうがいい。

4. 授業後の感想

今回の試みについて、報告者は2人もほぼ、同様な感想を持った。

肯定的感想

- ・ほぼ全員の学生が積極的に会話作りに参加し、いつもより、活気のある授業になった。
- ・自分たちが正しく作れた部分と間違った部分が明確になったので、学生は丸暗記ではなく、各自のポイントを押さえた発話練習を心がけていたように思う。
- ・応用練習も比較的スムーズにできた。
- ・自分がこの場面に適した文を作ることができたということで、自信を持つことができたように思う。

否定的感想

- ・時間がかかる。時間的に余裕のあるスケジュールでないと、実施できない。この方法を採用しない部分に使う時間が少なくなってしまう。
- ・できるだけ正しい文を作らせるための誘導が難しく、たいへんである。既出の単語を覚えていない場合、誘導に苦労した。

5. 今後への展望

学生の感想からもこの方法は有効であることはわかったが、時間がかかることが難点である。全体を作らせることは時間的に不可能であるので、モデル会話の一部分で実施することが実状に合っているように思う。重要な部分、実用的な部分などでやってみるのが有効と思われる。今回は Vol. 2のダイアログで行ってみたが、語彙の問題、状況説明が複雑になる、時間が足りない、などの理由から、Vol. 2レベルより Vol. 1レベルでのほうがこの方法は使いやすい。また、この方法が可能な Lesson と不可能な Lesson がある。

クラスのレベルに拘らず、多くの学生に好評であったが、好きではないと感想を書いた学生も1名いた。自分から発言をすることが苦手な学生には配慮が必要であると思う。いかに全員をまきこんで進めていくかも課題である。

現在のコースのスケジュールでは、モデル会話を学習してから、Discourse Practice をしているが、Discourse Practice をしてからのほうがスムーズに会話ができる場合もあるのではないかとと思う。重要な部

分の理解が済んでいれば、スムーズに作ることができ、他の部分に時間をかけることができ、モデル会話全体の流れもつかみやすくなると思う。ダイアログと Discourse Practice の順序を変えるのが不可能な Lesson もあるが、一部を除き、可能であると思われる。今後、検討してみたい。

モデル会話が長くなればなるほど、ここなら使えるとか、ここだけは覚えて使ってみようと思わせるやり方が必要になると思う。受身になりがちなダイアログの授業が学生の積極的な参加によるものになるよう検討を続けていきたい。

[報告 2] チェック項目による学習者同士のフィードバック

嶽 逸子

実施クラス：全学向日本語講座中級（学習者数16名）
実施時期：2004年後期、『現代日本語コース中級Ⅰ』
第4課「許可をもらう」の用法練習とモデル会話の学習が終わった後。

1. 授業の背景と目的

全学向け中級クラスには、このレベルで要求される日本語らしい話し方がなかなか身につかず、初級レベルを抜け出せない学習者もいる。学習者が自ら問題点を認識するためには録音して聞くのが一番だが、全学向けのクラスでは、人数が多いことや週に1回ということから、その時間が持てない。これまで数名の会話を録音し、教師がフィードバックを行って問題点を共有してもらうという方法を数回とってみた。しかし、この方法ではやはり当事者以外の学習者には自分の問題として受け止められないようであった。

そこで、2004年度後期は1コマの中でクラス全員の会話を録音してフィードバックまで行うという目標を立てた。フィードバックは学習者全員で、4つの項目について行うことにした。4つの項目とは 文体、表現、状況や理由の説明のしかた、発音やイントネーションに関するもので、いずれも学習者の多くが問題を持つ点である。目的は学習者がこれらの項目に注目して会話を聞き、自分の問題点に気づくこと、そ

してよりよい話し方について考えるきっかけとすることである。クラスでは10月の授業開始時期より、(1) 文体が使い分けられること、(2) その課の表現が正しく言えること、(3) 状況や理由を上手に説明できること、(4) 聞き手にわかる発音やイントネーションで話せること、の4点を「今より上手に話すために必要なこと」とした。(2)は4課なら「許可をもらう」ための文そのものを指す。(3)は「んです」や中止文などを用いた、より自然な日本語で状況や理由が説明できることを指す。(4)にはその場にふさわしい音調で話せることも含めた。それぞれの項目のキーワード(上記の下線部分)はたびたび板書し、学習者に印象づけるように心がけた。

2. 授業の流れ

授業は以下のように行った。

- 1) 教師が授業の流れを説明する。
- 2) 学習者は2人1組のペアになる。
- 3) 「許可をもらう」会話の状況設定と流れが2つ書いてあるシートを学習者に渡し、教師がそれを説明する。
- 4) 各ペアは2つのうち1つを選び、会話を作成し練習する。
- 5) 練習が終わったペアから録音する。録音が終わったペアはもう1つの会話を考える。
- 6) 教師はフィードバックのための項目を板書する。
話し方は丁寧だったか。 許可をもらうための文はきちんと言えたか。 状況説明は上手に言えたか。 発音やイントネーションはわかりにくくなかったか、の4点である。
- 7) すべてのペアの録音終了後、全員でそれを聞く。
4つの項目について学習者同士でフィードバックする。問題はどこか、どう言えばよかったか当事者も含めて意見を出し合う。

教師が会話の状況設定をしたのは、全員が状況設定を把握している方が、聞くとときわかりやすく、項目に注目しやすいと考えたからである。数を2つに限ったのは全員が録音を終えるまでの待ち時間を有効に使えること、また2つなら全員がどちらも学ぶことができると考えたからである。同時に、複数のペアが考えることによって、違いが明らかになることもねらった。

3. 教師の観察とアンケート結果

授業には16名が出席していたが、録音までの流れはスムーズだった。多くの学習者が自分の日本語を聞くのは初めてだということで、練習を繰り返したり、録音し直したりした。録音会話を聞くと、「(項目の)はよかったが、は『ちょっと・・・』と言ったほうがいい」、「は助詞が違うと思う」、「はまあまあだった」、「一番上手だった」などの意見や感想が活発に出た。学習者の方から、「よくわからなかったから、もう一度聞かせてほしい」と言うことも数回あり、ほかのペアの会話も熱心に聞いていたことがよくわかった。遠慮がちな学習者には教師から「はどうだったか」などと聞き、発言を促した。学習者がの問題点に気づいても、どう直したらいいか意見が出ないとき、あるいは問題点に気づかないときは、教師がヒントを出し全員で考えるようにした。学習者は録音会話を最後まで興味を持って聞き、全員が何らかの意見を述べた。

この授業について16名にアンケートをとった。以下に質問と5段階評価(5が一番いい評価)の平均を示す。

- [1] ペアで考えて会話を録音するのは勉強になりましたか。 4.7
- [2] ほかの人の会話を4つの点から聞いて問題点を考えたのはよかったですか。 4.6
あなたの役に立ったと思いますか。 4.6
- [3] 自分の問題点について考えましたか。 16名全員が「はい」
自分の問題点はどんなことだと思いましたか。(自由記述)
- [4] 授業に積極的に参加できましたか。 4.8
- [5] 授業についての意見を書いてください。(自由記述)

自分の問題点についての記述では、丁寧な話し方についての記述が5名、発音の悪さ、イントネーションの不自然さについての記述が6名、状況説明の難しさについて書いたものが4名、文法について4名、自分の持つ話の進め方と日本語のそれとの違いについて書いたものも2名あった。授業についての意見には「これからこのような授業方法をもっとすればいいです」「本当におもしろいし、役に立ちました」など好意的な意見が多かった。しかし、「少し速くて、ついていくの

がちょっとむずかしい」という意見も1名あった。

4．まとめと今後の課題

アンケート結果や教師の観察から、学習者は概ねこの授業に積極的に取り組み、お互いフィードバックし合うことによって、自分の問題点を認識することができたと考えられる。

これまで人数の多さや時間不足を理由に、全員の録音とフィードバックはとても無理だと考えていた。しかし今回の試みから、やり方次第で可能であり、学習

者も十分それに対応できるということがわかった。学習者がフィードバックの項目にすぐ対応できたのも、授業開始時期から繰り返しそれらを示し、教師の意図を理解していた結果だと考える。

2005年度から全学向けの会話の時間は週1回から2回になる。今回「速い」という意見があったが、少しゆっくりできるであろう。今後はフィードバックの項目をさらに検討して、学習者に様々な角度から話し方について考えてもらえるようにしたい。また学習者が項目を考え、それに基づいてフィードバックを行うという機会も設けたいと考えている。